日本に於けるショパンの受容について（３）　川染 雅嗣

過去２回の連載では明治期に於けるショパンの受容について述べてきた。そこではショパン研究者の多田純一氏の論文や著書を参考にして、ショパンの受容についてそのおおよそのところを読者諸氏にご紹介した。＊

澤田柳吉という日本で初のショパン弾きと言われた人物にも言及してみた。おそらく、ショパンという作曲家はあまりにも身近過ぎて、その音楽がどのようにして日本に輸入され定着していったかについて、考えたこともなかったというのが正直な感想ではなかろうか。気がついたらいつも自分のそばに寄り添っていたのがショパンなのだ。

日本人の情緒とショパンの音楽

今回は少し趣向を変えてみたい。前回までのようなやや学術的な話題ではなく、日本人の情緒とショパンの音楽の関係について書いてみたい。

皆さんはこんな噂を耳にしたことがあるだろうか。ポップスや歌謡曲の名曲の中には、クラシックからその旋律を拝借したものが多々あることを。その例をいくつか挙げてみよう。

１．ドラマ「北の国から」のテーマ音楽

これはさだまさし作曲で、ドラマの冒頭に流れるいわばメインテーマだ。歌詞はなくスキャットで歌われるのがこの曲の特徴だ。この原曲はL.v.ベートーヴェンの声楽曲“Ich liebe dich”だ。さだ自身が意図してベートーヴェンから借用したのかどうかは不明であるが、リズムやメロディーの動きに若干の違いはあるものの、とてもよく似ている。

実はもう一つの候補曲がある、それは W.A.モーツァルトの〈ホルン協奏曲 第1番 第1楽章〉の第1主題という説だ。こちらもよく似ている。

２．ヨドバシカメラの CM ソング

テレビでお馴染みの曲で、1975年から店頭で流れているというから驚きである。元歌はアメリカ南北戦争当時の愛唱歌〈リパブリック賛歌〉。ロシアの作曲家 A.グラズノフも自身の〈勝利の行進曲 Op.40〉にこのメロディーをモチーフとして用いている。

３．牧美智子の〈わたしのギャラリー〉

これは W.A.モーツァルトの〈交響曲第40番 第1楽章〉の冒頭の主題をそのまま使っている。潔いくらいである。これはもうカバーと言っても良いだろう。サビに入ると変化していくのだが、ここまで大胆にクラシックを使った作曲の高田弘も大したものだ。1977年の作品である。

すっかり前置きが長くなってしまったが、ここからいよいよ本題に入る。

松島つねの名曲〈おうま〉

ではショパンの場合はどうなのだろう。

皆さんは松島つねという作曲家をご存知だろうか。1890年に生まれ、1985年に没している。彼女はここで話題にしている澤田柳吉より4年後に生まれ、同じく東京音楽学校で学んだ作曲家・ピアニスト・ピアノ教師である。

彼女が残した名曲に〈おうま〉がある。誰でも知っている曲だ。この曲の冒頭部分はショパンの〈練習曲 変イ長調 Op.25-1〉にそっくりだ。一度聴いてみて欲しい。だがこれはまだ序の口で、実はまだまだ先があるのだが、今回はここで字数が尽きたようだ。次回は更に興味深い例をご紹介し、若干の音楽的・心理的分析も試みてみたい。　（つづく）

（かわそめ・まさし、昭和音楽大学特任教授）

新刊紹介

現代ポーランド音楽の１００年 ～シマノフスキからペンデレツキまで～

ダヌータ・グヴィズダランカ（著） 白木太一、重川真紀（訳）

音楽之友社 ２０２３.１２

ショパン以外に我々はポーランドの作曲家をどれだけ知っているだろうか。音楽に詳しければ、シマノフスキやルトスワフスキ、ペンデレツキなどの名前はなじみ深いだろうが、本書にはこれらのほか、おそらく音楽関係者にもほとんど知られていない作曲家がたくさん登場する。「現代ポーランド音楽」とタイトルにはあるが、現代のみならず、かなり古い時代からのポーランド音楽の歴史がはじめの二章で詳しくまとめられ、まずその情報の量と密度に圧倒される。さらに残りの章では、ポーランド音楽の「ポーランド性」や新しい音楽の模索のあり方、オペラのジャンル、女性音楽家、亡命などのテーマが立てられ、ポ

＊ http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE110-111_ChopinJapanKawasome.pdf

ーランド音楽を立体的に概観できる構成になっている。これは類書にはあまり見られない特徴だろう。

国家の歴史と音楽の深い関係

本書を読んで特に印象深いのは、国家の歴史と音楽の深い関係である。音楽と社会の関係はどの国の音楽史においても語られるが、これほどまでに世界史的事件が頻発し、音楽家が政治や社会と直接関わる音楽史は他にあまりないだろう。

例えば、ヨゼフ・コフレルという作曲家の例が語られる。彼は1896年にハプスブルク帝国で「ヨゼフ・コフラー」として生まれ、ポーランド領のルヴフで「ユゼフ・コフレル」として音楽活動に従事し、1939年には同じ場所で、今度はソ連市民として「ヨシフ・ゲルマノヴィチ・コフレル」になり、そしてその3年後には、第三帝国で義務付けられた法から排除されたユダヤ人「ヨセフ・コフレル」になる。このように多くのポーランドの音楽家たちは、国家の複雑な歴史の中に直に巻き込まれてきたのである。

20世紀の歴史の中で、ポーランドにとっての最大の事件の一つは社会主義の経験であろう。それはソ連も同じだが、ソ連とポーランドの音楽界の違いが面白い。「社会主義リアリズム」の生みの親だったソ連とは異なり、それを押し付けられたポーランドでは、それがドグマとなって音楽界を支配したのはほんの短い期間だったため、その路線で作曲家が育成されることはなかった。逆に、社会主義リアリズムはそれまでの民族性への過度の固執から解放してくれ、ポーランド音楽を新たな跳躍へと導いた功績の方が大きいとすらいう。

国際現代音楽祭「ワルシャワの秋」

また、ソ連と異なり、音楽にはあまり政治の介入が強くなかった社会主義国ポーランドならではの現象として、1956年から開催されている国際現代音楽祭「ワルシャワの秋」も興味深い。これは「東西の架橋の役割」を果たし、西側、東側両方の現代音楽が同時に取り上げられるという、他にはない現象が見られた。

本書では、このようなポーランド独特の社会的文脈の中で音楽の様々な事象が語られていく。だから、膨大な数の人物の活動や楽曲に関する詳細な記述に圧倒されつつも、無味乾燥な教科書的記述ではなく、音楽を取り巻く歴史的、政治的文脈の中でそれぞれの人物がどのような思いで、どのような立場でそれぞれの音楽活動を行っていたかが伝わってくるので、読者は臨場感をもって興味深く読み進めることができる。

ポーランド音楽研究の第一人者による詳細な音楽史である本書は、このように多くの歴史的事象と絡めながら論じられているため、その翻訳は訳者に様々な知識を要求する大変な作業であったことと推察される。その点、本書の翻訳はポーランド史専門の訳者とポーランド音楽専門の訳者二人による共同作業によるもので、信頼のおける翻訳になっていると思われる。ポーランドの歴史、文化、音楽に関心のあるすべての人に手に取ってもらいたい良書である。　（高橋健一郎、大阪大学教授）

ポーランドの巨匠
アグニエシュカ・ホランド 監督の話題作

2023 年｜ポーランド、フランス、チェコ、ベルギー合作
152 分｜ビスタ｜カラー・モノクロ｜5.1ch
原題：Zielona Granica｜英題：Green Border

「ベラルーシを経由してポーランド国境を渡れば、安全にヨーロッパに入ることができる」という情報を信じて祖国を脱出した、幼い子どもを連れたシリア人家族。しかし、亡命を求め国境の森までたどり着いた彼らを待ち受けていたのは、武装した国境警備隊だった……。

〈監督〉Agnieszka Holland（アグニエシュカ・ホランド）　1948 年ワルシャワ生まれ。プラハで映画制作を学び、70 年代からアンジェイ・ワイダ運営の映画ユニット「X」に所属。1980 年、国際映画批評家連盟賞受賞。翌年の戒厳令を機に西欧に移住。85 年以来 3 度アカデミー外国語映画賞にノミネート。『ソハの地下水道』2012、『赤い闇　スターリンの冷たい大地で』2019 など。2020 年、ヨーロッパ映画アカデミー会長に就任。

〈監督声明〉
映画は無力ではありません。
世界と人間の運命についての真実を、
異なる視点から多面的に映し出すことができるのです。

KINO
2024. 5/4（土）～シアターキノ（中央区狸小路 6 丁目）
上映時間・期間はご確認ください 011-231-9355